

現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.131 ピコ太郎



YouTube 動画より

彼がこのPPAPをユーチューブにアップしたのは今年8月25日だった。これがたちまち人気になり、1か月後には動画投稿サイト、9GAGに掲載され、イギリスBBC放送などからツイッターでピコ太郎本人に直接

突然の世界的ブーム

中年男のピコ太郎が、派手な衣服の上からヒョウ柄のロングマフラーをたらし、

アイハヴァーベン、アイハヴァーパイナップル、(合体する動作の後で)パイナップルボーベン

などと奇妙でリズミカルな歌詞を電子的な音楽にあわせて歌い(唱え)踊る。ただそれだけの1分弱の動画である。

2016年はイギリスのEU離脱国民投票や、暴言・失言王のドナルド・トランプ米大統領誕生など、まさか、まさかの連続だったが、その影で、大阪のおじさんふう芸人、ピコ太郎がユーチューブを舞台にわずか2ヶ月の間に世界のメディアを席巻した動画「ペンパイナッポーアーベン」(PPAP)もまた、グローバル時代ならではの「まさか」現象だった。

問い合わせが来るほどになった。

9月28日に若者に人気の歌手、ジャスティン・ビーバーが「もつともお気に入りのビデオ」とツイートして話題沸騰、ユーチューブの音楽グローバルランキン

グで週間再生回数世界一となつた。ギネス記録にも、米芸能メディア、ビルボードのHOT100にランкиングした最も短い曲として認定されている。

この異常人気に日本のテレビでも取り上げられた。日本外国特派員協会で会見、実演までした。12月5日現在のユーチューブの再生回数は9467万回を超えている。製作費10万円たらずの動画がわずか2ヶ月で世界を駆けめぐつたわけである。

ユーチューブでは、世界各地の若者たちがPPAPをまねて、あるいはそのパロディ版を作つて歌い、踊つている。先日テレビを見ていたら、米次期大統領となつたドナルド・トランプ氏の孫娘が、ベッドの上でPPAPを歌いながら踊つていた(もちろんユーチューブに投稿されている)。

PPAPはユーチュン新語・流行語大賞のトップ10に選ばれ、ピコ太郎本人は今年の紅白歌合戦出場もねらっているらしい。またユーチューブのコマーシャル

料、テレビ出演、DVDやキャラクター

グッズ売り上げなどで大金が転がりこみ

そうである。ピコ太郎は関西で活躍する

芸人、古坂大魔王と見られるが、本人は

あくまでピコ太郎のマネージャーを名

乗つている。

投稿動画ビジネスになる

テレビが全盛だった50年ほど前の1969年、名物司会者の大橋巨泉が「みじかびのきやぶりことねばすぎちよびれす

ぎかぎすらのはつぱふみふみ(だつたかな)」と意味不明の短歌(?)を口ずさみ「わかるね!」と笑いかけるCMがあつたが、これも当時大人気となり、当該万年筆は大きく売り上げを伸ばした。

両者とも極端に短いメッセージで、ここに日本文化の伝統が流れていると言えなくもない。ただしピコ太郎の場合はまったくの英語である(本人が会見で後で気づいたんですが、歌詞が英語だったんですね)と述べていた)。

巨泉の場合は広告会社が製作したテレビCM、ピコ太郎のほうは自作自演の

わずか2ヶ月で世界を席巻した極短動画

やの・なおあき／1966年朝日新聞社入社。79年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88年『ASAHIパソコン』初代編集長。『月刊Asahi』編集長の後、95年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97年総合研究センター主任研究員。2002年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03年4月から06年3月まで明治大学法学部客員教授。06年4月から情報セキュリティ大学院大学客員教授。07年4月から12年3月までサイバーユニバーシティIT総合学部教授。著書に『インターネット術語集』(岩波新書)、『サイバーリテラシー概論』(知泉書館)、『総メディア社会とジャーナリズム』(新聞・出版・放送・通信・インターネット) (知泉書館)、2009年度大川出版賞受賞)など。最新刊『IT社会事件簿』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)では、ITの進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。右写真



【5分間のサイバーリテラシー公開授業】2014年1月から、オンライン無料講座の仕組みを利用し、「サイバーリテラシー」に関する一コマ5分間の授業を公開中。「IT社会を豊かに生きるために~社会編」は「サイバーリテラシーとは」「情報倫理について」「Web2.0とは何だったか」など、「『IT社会事件簿』を読む~事件編」は「遠隔操作ウイルスで誤認逮捕」「米政府による大規模諜報活動告発」「東日本大震災とソーシャルメディア」などのタイトルで公開中。サイバーリテラシー研究所のサイトからアクセスできる。

サイバーリテラシー研究所 <http://www.cyber-literacy.com/>

ユーチューブ投稿動画。前者はもっぱら国内だけの話、後者は完全にグローバルと、この間のメディア状況の変化がうかがわれて興味深い。

ピコ太郎現象で驚くのはそのスピードと広がりである。いまや世界134の国・地域で再生されているといい、それが地域でP.P.A.Pを見た人が、自分たちも歌い、踊り、そのままユーチューブにアップしている。連鎖はまさにイン

タラクティブである。ユーチューブの親会社であるグーグルが2011年より投稿動画に広告をつけようとしたために、再生回数の多い動



ピコ太郎、きんとうん(SM)に乗る

イラスト kkkkkkkkkkkkeeeeeeee

画をアップするとそれなりの収入が得られる。ユーチューブに動画をアップして、それで生計を立てようとする人は「ユーチューバー」と呼ばれており、動画投稿はビジネスにもなるのである。

ソーシャルメディア独歩の時代

ソーシャルメディアが広がり始めたのは、日本では東日本大震災、世界的にはアラブの春が吹き荒れた2011年ころである。同年5月には米歌手、レディー・ガガのツイッターのフォロワー数が1000

万人を突破した。2位はジャスティン・ Bieber(970万人)、3位はオバマ大統領(802万人)だったが、たとえば既存メディアの新聞で発行部数1000万部の新聞などいまやない(ちなみにジャスティン・ Bieberその人がユーチューブでの投稿で才能を認められ、躍人気歌手になった)。

メディア環境の変化は、それよりさらに10年以上前から起こっている。1999年、16歳の新人歌手、宇多田ヒカルのデビューアルバム「ファースト・ラブ」が発売後わずか2か月半で600万枚も売れる出来事があった。売り上げ枚数、そのスピードぶりとともにわが国音楽史上初の大記録だったが、当時、私は「ふだん接するのがマスメディアだけ」という比較的年長の一般社会人にとっては、彼女の登場と「偉業」は晴天の霹靂のよう受け取られた」と書いている(『インターネット術語集』)。

彼女の音楽は、専門の音楽雑誌、FMラジオ、衛星放送、そしてインターネットと携帯電話で広がった。このころから若者を中心とする人びとのメディア環境は変わりつつあったが、2011年の「ソーシャルメディア元年」を経た後に、今回のピコ太郎現象がある。

ピコ太郎はマスマディアとほとんど無縁に、世界に大きく飛躍した。これをソーシャルメディアが自立したという意味で、「ソーシャルメディア独歩の時代」と言ってもいいだろう。